

	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本水循環文化研究協会会報
		発行責任者 酒井 彰 (理事長)
		令和7年4月15日 通巻115号

## ふくりゅう 115号 目次

バルトン忌 2025 特別企画～謝長廷前大使を迎えて～の概要	酒井 彰	1
2025 年度定例総会開催のご案内		2
第3回水循環文化研究発表会開催ならびに論文募集について		3
追悼 本会代表評議員 西堀清六氏を偲ぶ	稲場紀久雄	4
野田佳江さんの御逝去を悼み	寺脇 敬永	4
定例研究会「地下水と水循環」ならびに水循環勉強会報告		5
海外技術協力部活動報告会を行いました		6
短信・会員情報		7
事務局より・編集後記		8

## バルトン忌 2025 特別企画～謝長廷前大使を迎えて～の概要

本会理事長 酒井 彰

今年のバルトン忌では、台湾の謝長廷台北駐日経済文化代表処大使をお迎えし、記念事業を企画しております。本稿では、本協会が継続的に行ってきたバルトン顕彰活動の意義を再確認しておきたいと思っております。

ご承知のように William Kinninmont Burton は、日本政府の招聘に応じて 1887 年来日し、帝国大学工科大学で衛生工学の講座をもち、多くの上下水道技師を輩出するとともに、内務省衛生局の顧問技師として日本各地の上下水道計画の指導にあたり、日本の衛生工学の礎を築きました。その後、内務省衛生局長であった後藤新平の要請により、1896 年から約 3 年間台湾に渡り、水源調査や水道計画づくりに従事し、当時悪霊島と称せられたかの地で、公衆衛生の基礎を築くため献身的な努力を惜しみませんでした。

本協会では、前身の日本下水文化研究会の発足時より、毎年バルトン忌を開催してまいりました。バルトン忌が恒例化されたのは、「年に一度衛生工学の原点に戻ってその在り方を考えることが必要」（稲場紀久雄、「下水文化研究」34 号巻頭言）という理由からでした。1999 年には、没後 100 年を記念するシンポジウムを開催し、2006 年、2009 年にはバルトンの

生誕地スコットランドで記念交流事業を行いました。母国では彼の偉業を知る人は少なく、交流事業はスコットランドの人たちにバルトンの功績を知っていただくことを意図しておりましたが、敬意をもって受け入れられ、日ス双方は協働することにより記憶に遺る事業を行うことができました。2006 年の交流事業の一環で、バルトンが幼少期を過ごしたエジンバラのクレイグハウスの前に建立した記念碑は、近くの公園に移されましたが、公園を訪れる人々に日本人のバルトンへの深い感謝と敬意を伝えていきます。



回を重ねてきたバルトン忌で行われた数々の講演録はホームページで読めるようになっており、青山墓地の墓前に立てられた看板の QR コードからも本協会ホームページのバルトンのページにリンクして



バルトン記念碑の前で(左から製作者グラシエラさん、稲場前代表、エジンバラ市長、2006年)

います。これは、バルトン先生の功績や本人の人となり伝えるためだけでなく、それを継続的に顕彰する者がいることを伝えたいためでもあります。ある英国人ジャーナリストからは、このような行為に驚嘆の声があがっています(コリン・ジョイス「ニッポン社会」入門、生活人新書、2006年)。

一方、台湾でも多くの方が、バルトンの功績に対する感謝の念を抱いてきました。中国には「飲水思想」という言葉があり、人が水を飲むとき、必要な施設を作った人、井戸を掘った人の恩を忘れてはならないという教訓を意味しますが、台湾ではバルトンへの恩義を忘れず、その功績を讃えるため、銅像が建てられました。

本協会と台湾の関係では、稲場前代表の著書(「都市の医師」(バルトンから衛生工学を学び、ともに台湾に渡った濱野彌四郎氏の評伝)、「バルトン先生明治の日本を駆ける!」)が台湾で翻訳出版(鄧淑晶・鄧淑瑩訳)されたことによって、台湾の人たちがもともと尊敬の念を抱いていたバルトンの生い立ちから縁の人たちのことまでを知る機会となりました。そ

※ 本稿作成にあたり齋藤博康「バルトンと台湾の水道」(機関誌「下水文化研究」11号)を参考にしました。



バルトン胸像除幕のシーン(台北)  
出所: TAIWAN TODAY (2021/3/31)

のことが戦時中金属回収命で供出されていた自來水博物館のバルトン胸像の復元事業(除幕式は2021年日台で同時開催)につながったことと思います。今回お迎えする謝長廷さんは昨年8月まで台北駐日経済文化代表処大使を務められ、自來水博物館のバルトン像復元事業にも尽力されました。また、翻訳を担われた鄧淑晶さんは、台湾と本協会の橋渡し役となり、今回の日台交流をひとつの目的とした特別企画立案にも参画されています。

バルトン忌2025では、バルトン忌をはじめとするバルトン顕彰活動を継続し、後世に引き継いでいくことの意義を再認識し、我々と同じく、バルトンを顕彰しようという熱意をもっておられる台湾の方々との交流を深める機会としたいと考えています。

現時点では、お忙しい謝前大使の日程をすでに確保していただいていることから8月5日に開催すること、午前中墓参、午後記念講演会とすること、本協会が主催すること以外は決まっております。

講演会プログラム等企画内容は今後検討のうえ、会員の皆様にご案内してまいります。会員各位におかれましては、バルトン忌恒例化の意味を振り返り、当日の参加にとどまらず、事業への協賛、運営へのご協力を切にお願いいたします。

## 日本水循環文化研究協会 2025年度定例総会のご案内

2025年度定例総会の開催をご案内いたします。総会の開催日程、場所、予定している議案は以下の通りです。

総会当日の午後に、次の記事でご案内している通り、研究発表会を開催いたします。総会、研究発表会の同日開催はできるだけ定例化していきたいと思っております。

2022年度に改正した定款では、電子媒体での委任状提出ならびにリモート参加での表決が可能になっています。詳しくは、総会議案書等をお届けする際にご案内いたします。

総会の午後開催する研究発表会は、会員が集い、情報共有、意見交換を図る場です。併せてのご出席をお願いいたします。

記

日時：2025年7月5日（土） 10:30～12:00  
(10:00 受付開始)

場所：新宿 NPO 協働推進センター  
(新宿区高田馬場 4丁目 36-12)

次第：

第1部 総会

○ 開会の辞 10:30

○ 総会議事次第

- (1) 定足数確認／(2) 議長選任／(3) 書記指名
- (4) 議事録署名人名指名
- (5) 議事

第1号議案 2025年度役員改選に関する件

第2号議案 2024年度事業報告ならびに会員の現況報告

第3号議案 2024年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

第4号議案 2025年度財産目録の承認に関する件

第5号議案 2025年度事業計画及び予算に関する件

○ 閉会の辞 11:20

第2部 お知らせならびに部会等活動報告

11:25～12:00

バルトン忌 2025 特別企画

海外技術協力部

## 第3回水循環文化研究発表会ならびに論文募集について

第3回水循環文化研究発表会を以下の要領で開催いたします。昨今、水を取り巻く問題は多様化するとともに、新たな問題も起こっていますが、問題を認識するうえで文化の視点、生活者の視点の重要性も増しているように思います。

ふるって応募いただき、会員相互の交流の場づくりに参加していただきたいと思っております。リモートでの発表、参加も歓迎しております。

記

日時：2025年7月5日（土） 13:00～16:45  
(時間は予定)

会場：新宿 NPO 協働推進センター

前回（一昨年）より、論文の応募等は、「応募」、「論文概要」提出、「発表」、「論文提出」という流れで行っています。スケジュールは以下の通りです。

- ① 応募申し込み締め切り 5月16日（金）
- ② 論文概要提出締め切り 6月6日（金）
- ③ 論文発表 7月5日（土）
- ④ 論文提出締め切り 8月23日（土）

応募される方は、ホームページにある書式をダウンロードして必要事項を記入のうえ、メールに添付して提出してください。ホームページからのダウンロードが難しい方は、1)タイトル、2) 著者名・所属（共著者を含む）、3) 要旨：400字以内、4) キーワード（5つ以内）、5) 応募分野（以下の4つの応募分野から選択）、

6) 発表形式（口頭発表、リモート発表、誌上発表から選択）、7) 連絡先を任意の形式でかまいませんので、メールあるいは郵送でお送りください。

応募された分野に応じて、プログラムを作成します。論文応募分野は以下の通りといたしますが、水に関する広範なテーマを受け付けておりますので、募集分野に記載の例示にとらわれず、応募してください。

- ① **水循環文化史**：水循環の変遷、人と水との関わりに変遷、歴史、近代化遺産、水循環文化功労者など
- ② **水循環健全化活動**：水循環保全ならびに健全化に向けた活動、水循環の実態に関わる調査活動など
- ③ **水循環管理**：水循環管理に関わる研究、水インフラのガバナンスに関する研究（老朽化問題、老朽化対策）、化学物質によるリスク管理、政策提言など
- ④ **国際協力・海外水文化**：開発途上地域での水に関わる国際協力活動の経験、途上国の状況に適した技術、海外の水文化・水事情など

※ 国際協力に関する論文から、「バルトン賞」を選考します。バルトン賞は、本協会が「バルトンの日本・台湾での活動に海外技術協力の理想の姿を認める」ことに由来しています。また、優秀論文を選考します。

## 追悼 本会代表評議員 西堀清六氏を偲ぶ

名誉会員 稲場 紀久雄

本会代表評議員 西堀清六氏が去る2月14日逝去されました。享年101。西堀氏は、本会が1986年任意団体「下水文化研究会」として誕生してから今日まで39年に亘って本会の活動を支援されました。



西堀氏は、名経営者として知られていました。故板倉誠氏から1973年小さなコンサルタント会社「NJS（日本上下水道設計株式会社）」を引き継がれ、以来31年間の長きに亘って社長として、その後は会長として社業の発展に尽

され、NJSを東証一部上場企業に育て上げられました。西堀氏は、「分度と三方良し」の経営に成功されたのでした。

西堀氏は、下水文化研究会の活動に注目されました。研究会が「“下水”と言う原点に立って、“文化”とい

う視点からわが国の水を守ろう」としていたからです。さらに、研究会は、会費収入の10%を下水文化博物館の設置を図るため基金として留保した上で活動していました。この方針は、西堀氏の経営理念に叶ったものだったのです。

下水文化研究会は、水道界で最も早くNPO法人格を承認された純粋なボランティア団体です。「特定非営利活動法人法」は、1998年3月成立しました。私達は、法人格取得を目指して翌年5月設立総会を開催し、同年10月法人格を得たのです。難問の一つは、事務所の設置でした。乏しい予算では、事務所設置は高根の花でした。この時、西堀氏は、新宿区富久町の自社ビルの一室を破格の好条件で提供して下さいました。

研究会が水循環基本法の制定に一定の役割を果たし、「NPO法人 日本水循環文化研究協会」へと発展出来たのも西堀氏の支援に負う所大と思います。研究会は、感謝の心を込めて2016年8月西堀様に「久保起記念特別賞」を贈呈しました。ここに生前の西堀氏のご支援に衷心より感謝し、慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

(2025年3月23日記)

## 野田佳江さんの御逝去を悼み～地下水を早く 地域の共有財産に～

大野の水環境ネットワーク 寺脇 敬永

大野市は、「水」を取り巻く自然の要因に恵まれた地域です。しかし、人為的に水の循環が損なわれたことは否めません。地下水は大野市の宝もので生命の水です。

「大野の水を考える会」（水環境ネットワークの前身）の創始者である野田佳江さんとは、家が近く、水の問題に互に関心が深く、話しやすい関係でした。よく家に来られたり、電話をもらったりしました。

熊本で開催された「地下水フォーラム」では、発表の資料を一緒に作り、パワーポイントにして協力させていただいたこと等懐かしく思い出されます。柴崎達雄先生を偲ぶ会では、野田さんが、地下水の保全活動を通じて得られた広い人脈に驚くばかりでした。

大野市は、地下水管理計画を実行しようと思うと、法律の壁に突き当たりましたが、「水循環基本法」は大野にとって大きな追い風です。

野田さん！実現に向け、これからも偉大な力で応援願います。



水制度改革議連をお迎えして(2013年)  
中央が野田さん、左は小宮山泰子衆議院議員

(2024年12月18日ご逝去 享年98歳)

## 定例研究会「地下水と水循環」ならびに水循環勉強会報告

2025年3月22日、芝浦工大名誉教授守田優氏を講師に迎え、定例研究会「地下水と水循環」を新宿NPO協働推進センターにおけるリアルとZoomによるリモートのハイブリッドで開催しました。併せて15名近い会員が参加されました。この定例化研究会は後述するように第3回水循環勉強会としても位置付けています。

講演は、守田先生の東京都土木技術研究所での地下水に関わる業務経験から始められ、

1) 地下水とは、2) 水循環とは、3) 水循環障害、4) 健全な水循環へ向けて、という順序で進められました。主な講演内容は以下の通り。

### ① 地形と地下水の特徴

- 地下水は、種類（不圧 or 被圧）、地形（低地、台地、丘陵地、扇状地）によってその性質は異なるが、地下水管理において、その点が考慮されていないことが少なくない。地下水を理解するには地形や地質の知識が不可欠である。
- 河川と地下水は水循環の構成要素としてつながっているが、循環するのは不圧地下水で、被圧地下水はほとんど循環しない。その点で、一般的な水循環の図は地下水の実態を正確に表していない。
- 水循環の健全化を実現するためには被圧地下水までを含めた地下水を対象とする必要がある。

### ② 地下水と水循環障害

地下水に関わる水循環障害を次のように分類、整理された。

- 水循環不良：開発や都市化による不浸透域の増大、ならびに雨水流出機構の変化の結果、地下水涵養量が減少する。水循環不良に取り組んだ例として、八王子ニュータウンの水循環再生システムが紹介された。
- 水循環不全：被圧地下水の大量揚水、不圧地下水の被圧帯水層への漏水。1960年代に井の頭池が涸渇したのは被圧地下水を水道水源として利用したことが原因と考えられる。このような場合、雨水浸透の効果は限定的である。
- 地下水流動阻害：不圧地下水の流動を堰き止める線状構造物により、漏水、根腐れ（上流側）、井戸枯れ、湧水枯渇（下流側）などが生じる。
- 地下水揚圧力：東京駅、上野駅のように、揚水規



リモートでの定例研究会の開催

制により上昇に転じた地下水の浮力で構造物破壊の危険性が生じた。

- 地盤沈下：被圧地下水の過剰揚水による粘土層の圧密。

### ③ 地下水管理の重要性

- 地下水利用の考え方には、公水論（政府による解決）、私水論（市場原理による解決）、共有資源論（セルフガバナンスによる解決）の3つがある。
- 地下水は自然科学と社会科学の両面からアプローチする必要がある。地域ごとに地形や自然条件が異なるため、地下水管理も地域特性に応じて行なわれるべきである。
- 地下水は共有資源である。地域の自然条件と地下水利用・規制などによって規定される地下水流動に関する科学的な認識を共有し、地域で自主的にルールを決める地下水ガバナンスを目指すことが重要である。

講演後の質疑応答では、地下水管理の先進地域とされていた大野市でもデータ収集が不十分であり、井戸ごとの詳細なデータ収集の重要性が指摘されました。

その後、参加者を交え、自然の水循環と人間活動のバランスを取ることの難しさ、地下水管理のための客観的なデータの重要性、事例研究の積み重ねを通じた意思決定の仕組みの模索する必要性、そして単に水循環の保全だけでなく、社会のあり方や幸福の定義も含め、水循環文化研究会での継続的な議論の重要性について確認されました。また、地下水管理における意思決定については、昨年度行った「水循環フォーラム・水循環を可視化する」（「水循環文化研究」2号）での議論が参考になるのではないかという指摘がありました。

## 水循環勉強会とその経緯について

日本水循環文化研究協会では、水循環ならびにその健全化について意見を出し合い、情報交換する場として、水循環に関する勉強会を進めています。その着地点としては、「水循環基本計画」に関わる課題を明らかにし、課題への考え方について関係者に提言することを考えています。

この日の定例研究会まで、河川、地下水、上下水道の専門家、水循環・水環境保全に関わる市民運動に携わっている方々が集まり、次のように2回の勉強会を開催してきました。

### 第1回 (1/8)

話題提供：清水康生（本会理事）

「水循環基本計画と水循環の実際」

#### 議論された内容

- 流域総合水管理について：目的間のコンフリクト、市民の捉え方という視点がみられない。現場の問題にアプライできるのか。
- 地下水に関して：データ監視システム、地域の特殊性の基づく管理
- 「水循環基本計画」で不十分な点：輻輳するステークホルダーの関与。自然と人間のバランスの議論。まちづくりとの関わり。

### 第2回 (2/10)

話題提供：梅林厚子（大野の水環境ネットワーク）

「大野市の現状と課題」

#### 提供された話題＝大野の水循環問題

豪雪地域でもある大野市の水循環問題に関し、大

野の水環境ネットワークのこれまでの取り組みについて説明された。

- 大野市は、地下水が豊富な町として知られているが、ダム建設や生活様式の変化により、地下水位の低下や湧水の枯渇が進行している。推進されようとしている下水道建設により大野の地下水位低下がさらに加速する懸念がある。
- 多くの市民は飲み水を地下水に依存しているが、ポンプ性能の向上により水位低下の影響を受けにくくなっている。
- 特に問題となっているのは、9月末から11月にかけて起こる地下水位の急激な低下。地下水位を上げ、変動を緩和したい。
- 国の水循環基本計画の見直しに対して、大野市などの地域の特殊性を考慮する必要があると感じている。

#### 議論された内容

- 地下水の監視体制／地下水位回復策
- 大野に適した排水処理／下水道と合併処理浄化槽／水利用に関する負担の公平性
- まちづくりを含め、水インフラのあり方を考える必要性

3回の勉強会を通じいくつか論点が抽出されたと思います。今後は、勉強会を継続するなかで、各論点について、一定の見解をまとめ、誰に対し、どのようなかたちで提言をするべきかについて議論を進めていきたいと考えています。

（文責：酒井彰）

## 海外技術協力部活動報告会を行いました

2025年3月29日、2024年度の海外活動報告会をリアルとZoomによるリモートのハイブリッドで開催しました。参加者は6名でした。報告会の内容は、①本協会の海外活動の方針、助成活動採択実績を中心に具体的に行ってきた活動の経緯、②2024年度から始めた地球環境基金助成活動（1年目）の報告、③かつてのパートナーNGOが行っているエコサントイレプロジェクトの支援、というものでした。

①では、本会の海外技術協力活動の概要を知っていただくため、ホームページに掲載されている法人化20周年記念誌の各論の要約ページにまとめられている海外活動の目的、実践内容及び実施方法、目指してきた「住民参加型社会開発プログラム」の



ワークショップでのリーダーによる発表（感染経路を表すとともに、それを断ち切る方法を説明）

プロセス、知見や経験をどう伝えていくか、そして、

これまでの活動を継続するうえでの課題について述べられました。さらに、ホームページ上に公表されているこれまでの報告書や教材などが紹介されました。

当日のメインとなる②については、実践している菊池美智子さんから報告されました。

### 水衛生施設管理能力向上プロジェクト

#### 活動内容

- バングラデシュのクルナ市内の3つの貧困層コミュニティを対象に、水衛生設備の持続的管理に向けたプロジェクトを実施している。活動内容には、ベースライン調査、リーダー向けワークショップ、一般女性向け衛生行動促進ワークショップ、水衛生設備の設置・改修などが含まれる。
- コミュニティによって進捗に差があり、一部で工事の中断などの問題も発生したが、キーパーソン等の協力を得て解決した。
- 次年度は新たな地域で活動を展開する予定で、それぞれのコミュニティの特性に応じた管理組織の結成、衛生管理システムの構築が課題となる。

#### コミュニティリーダーと一般女性

- リーダーたちは元々能力が高いが、今回の介入では知識を視覚化することで、理解が深まった。そのことはワークショップにおいて、一般女性への啓発をコミュニティリーダー自らが担ううえでも効果があったと考えられる。
- 一般女性に関しては、衛生習慣に関する質問紙調査を行っており、今回の介入効果については、昨年6月と今年3月の時点での変化を見る予定。

#### 手洗い（感染症予防）を習慣化する

手洗いの習慣化について報告会参加者を交えて議論された。知識はあっても実践が難しい点が指摘され、習慣化の方法について質問された。菊池からは感染症予防だけでなく自尊心に訴えるアプローチの重要性が述べられ、酒井からは、設備の維持とコミュニティリーダーの役割の重要性が強調された。そして、衛生行動の習慣化のためには、継続的な啓発活動や教育のために長期的なアプローチが求められるとい

う議論があった。

#### 水衛生設備の管理システム

今年活動対象としたコミュニティでは、コミュニティ単位で管理システムが構築されるどころ、ユーザーグループの独立性が高いところ、さらにユーザーグループをまとめる上位の管理組織が形成されたコミュニティがあるなど、管理体制に特徴が現れた。さらに、持続可能な水衛生設備の管理のために、各コミュニティが単独ではなく、相互に経験を共有し協力し合っていく体制構築が課題である。

#### エコサントイレ普及活動支援

報告会のプログラム③は、バングラデシュ現地 NGO（SPACE：本協会が20年前にエコサントイレの活動を始めた時のパートナー）がエコサントイレの普及活動を継続し、エコサントイレで生産される有機肥料を活用した農業を進めていることが紹介されました。

その後、エコサントイレについて、コストダウンの必要性、肥料の地域管理の必要性、施肥効果の確認、尿の潜在的価値などについて議論されました。

SPACEの活動支援のため、クラウドファンディングへの応募を検討していることが報告され、応募にあたって制作された、エコサントイレの利用、有機肥料の抽出、肥料の地域内流通、施肥、収穫の各シーンからなる動画が紹介（本会 Facebook にアップされている）され、参加者からは支持と情報拡散などへの協力が表明されました。



エコサントイレから得られた肥料で育成された野菜の収穫

（文責：酒井彰）

### 短 信 ・ 会 員 情 報

#### ● 2025年度地球環境基金助成金内定

本会は、昨年12月に2025年度の助成金申請をしていましたが、このほど内定ならびに助成金額の通知がありました。

▶ 活動名「バングラデシュ都市貧困地区における

水・衛生施設の持続的管理に向けたコミュニティの能力形成」（2年目）、助成額350万円

2025年度は、1年目にターゲットとしたコミュニティをフォローするとともに、本会にとっては新たな都市での活動をスタートさせます。

● 図書刊行のお知らせ

会員の山崎達雄さんが、水道公論誌（日本水道新聞社）に6回にわたって連載（2024年4月～2025年2月）された「水道協会名誉会員第一号 大井清一 その軌跡と功績」の抜刷を冊子にまとめられました。大

井清一は、京都帝国大学教授の身分で京都市議会議員に当選され、条例の改正などに取組まれた水道界の巨人のひとりです。ご関心のある方は山崎さんまで連絡してください。

(E-mail: yama2308@fancy.ocn.ne.jp)

事務局より

● 総会へのご出席をお願いします

2022年度の定款改正により、電子媒体での委任状提出、総会へのリモート出席が可能になっていますので、ふるってご参加ください。また、総会資料や振込伝票などの

郵送に伴う経費節減と事務の省力化のため、電子メールによる受取り、会費の口座振込にご協力をお願いします。

● 事務所移転に伴う定款変更の承認の手続き状況

東京都に必要な書類を提出し、新たな所管庁となる横浜市へ書類が送られましたが、一部書類の不備を指摘され、東京都

へ書類を再提出しました。現在、横浜市で審査中ですが、間もなく移管ならびに定款変更が承認されるもようです。

● 機関誌「水循環文化研究2号」刊行しました

年度末になってしまいましたが、3月25日機関誌を刊行しました。希望者ならびにふだん会報を郵送している会員には製本した機関誌をお送りしましたが、今年度は印刷費、送料の実費をご負担いただくことも考えていき

たいと思います。なお、名誉会員各位には引き続き製本版をお送りいたします。正会員、特別会員の皆様におかれましては、会報などのメール受取にご協力いただければ幸いです。

編集後記

山崎さんから「会員情報」でお知らせした冊子をいただき、会員の皆様にお知らせしました。会報「ふくりゅう」は、理事会・事務局からのお知らせだけでなく、会員情報の共有の場です。ぜひとも情報をお寄せいただきたいと思います▶バルトン忌の特別企画について報告いたしました。最近のバルトン忌への参加者は限られてきているように思いますが、今一度、本協会が続けてきた意義を継承するうえでも会員の皆様と認識を共有できたらと思っています。謝前大使のご参加がそのき

かけになれば幸甚です▶八潮市で起きた流域下水道幹線の損壊による道路陥没事故は、周辺に暮らす人々の生活への影響も甚大でした。図らずも我々の生活と下水道の密接な関わりを知らしめることとなりました。また、身近な化学物質である有機フッ素化合物 PFAS が健康リスクをもたらしています。今年は、1年ぶりに研究発表会を行います。水とライフ（命・生活）との関わりといった視点からの考察を含め、積極的な応募をお待ちしています。（酒井彰）

特定非営利活動法人 日本水循環文化研究協会

URL: <https://npo-jade.com> e-mail: [npo.jade@gmail.com](mailto:npo.jade@gmail.com)

Facebook: <http://www.facebook.com/groups/jadejapan/> ← [メンバー登録・投稿を!](#)

Blog: <https://blog.goo.ne.jp/jadetokyo> ← [こちらにも投稿を!](#)